

第5回祥明大學校・熊本県立大学学術フォーラムの報告

「東西の言語と思考」のテーマのもと、第5回韓国祥明大學校・熊本県立大学学術フォーラムが9月14日（金）祥明大學校天安キャンパスのコンヴェンション・センターにおいて開催された。冒頭、沈禹英（Shim, Woo-yeung）副総長から祝辞が述べられ、その後、午後1時半より両大学から合わせて4つの研究発表が行なわれた。

フォーラム前半部は英語による2つの発表が行なわれた。第一発表者の祥明大學校河明貞（Ha, Myung Jeong）准教授は‘Verb-Noun collocations in EFL learners’ English: A corpus-based approach’の論題で、韓国の英語学習者（learners of English as a foreign language）の作文に見られる動詞と名詞の連語（collocation）のうち、特に動詞が have, think, go, make の場合の連語の間違いをコーパスにもとづいて分析し、学習者のエラーが名詞の選択だけでなく、前置詞や決定詞（determiners）の選択にどのような影響を与えているかを詳しく論じられた。第二発表者の熊本県立大学三木悦三教授は‘What is Pragmatics Like?’と題して英語学の、特に語用論（pragmatics）の分野に関して、遂行文、メタ言語的否定、特殊付加疑問文の発表を行なった。

小休止を挟んで、後半部には日本語による2発表が続いた。第三発表者として登壇した平岡隆二准教授（熊本県立大学）は「日本における英語研究のはじまり（1808-1862）」の論題のもとに、江戸後期における蘭学の勃興をうけ、やがて1808年のフェートン号事件を境として英学奨励へと幕府の方針が転換してゆく経緯を豊富な資料を交えながら詳述した。そして最後に、第四発表者の朴錫（Park, Seok）教授（祥明大學校）は「第二枢軸時代と瞑想の役割」と題して、世界の諸宗教とその思想の伝播と変遷を紀元前の、カール・ヤスパースのいわゆる（第一）枢軸時代から今世紀にわたって俯瞰するとともに、第二枢軸期に相当する今日、全人類的な規模での新しい宗教思想の創出が一大課題となっていることを指摘し、その実現に欠くことのできない瞑想の役割を力説された。

それぞれの発表の後には指定討論者から懇切なコメントと質問が寄せられ、各発表者がこれに応えるかたちで討議がさらに深められた。100名を超える学生・教員が参加した今年度の合同フォーラムは、予定終了時刻を大幅に超過して、午後6時前に盛会のうちに終幕した。